

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者氏名: 80歳代 女性 要介護4

病名: 第5-7頸椎骨折術後、右上腕近位端骨折術後

利用サービス 入所

経過: 令和5年10月にご自宅の階段から転落し救急搬送された。慶応大学付属病院にて頸椎骨折、右上腕骨近位端骨折の診断にて入院。頭部CTにて慢性硬膜下血腫を認めていたが、11月に血腫は縮小傾向となった。骨折部位に対し経皮的椎弓根スクリュー固定術 (PSF)、右肩に対しリバーズ型人工肩関節置換術 (RSA) を施行。術後3ヶ月までは免荷にてスリングを着用されていた。その後、11月にリハビリテーション目的にてH病院へ転院、徐々に肩関節可動域、ADL向上する。令和6年1月更なるADL向上とリハビリ継続の目的でライフサポートねりまへ入所された。

内 容

本事例は、2024年1月より入所された。病前はADL自立しており、ご自身で身の回りのことをされていた方だった。入所時、頸椎・右上腕骨骨折から右肩に可動域制限があり、動作時に疼痛を生じていた。右手の握力は0kgであり、しびれや感覚障害を認め、生活場面にて利き手である右手は全く使用出来ない状態で、表情は暗くやや落ち込みが見られた。日常的に行う動作である、箸を使う、字を書く、顔を洗う、歯を磨く、物をもつなどの動作が右手では行えない為、ご本人は当施設でのリハビリを行い、右手で字を書けるぐらいに回復したいという希望があった。

初回カンファレンスにてご本人の希望を各職種で共有。リハビリに対して意欲的な姿勢を示していることから、自主トレーニングを組みリハビリのさらなる効果向上を狙う事とした。入所期間初期頃はリハビリフロアにある机でセラプラトを使用した「伸ばす」「細かくちぎる」などの自主練習を提供。また自己課題としてひらがな50音のなぞり書きを提供した。

各職種間でご本人に声をかけつつ、自主トレの進捗状況などを確認。出来ている部分や、入所時と比べて向上している部分をご本人に伝えるなどの対応を行い、意欲が継続するようにケアを行った。ご本人のモチベーションを維持することができたため、3か月間の間に自主トレーニングに置いて巧緻性向上訓練のみならず、筋力強化運動、全身運動なども組みこむことが出来た。

1ヵ月ほどで箸を右手で把持し食事が出来る様になり、2ヵ月目で歯磨きや洗顔なども右手で行えるようになった。3ヵ月ほどの訓練にて握力0kgから5.4kgまで向上あり。3ヵ月目に行われた調理訓練ではご自身で包丁を持ち、野菜を切って盛り付けるなどが出来る様になり、「こんなに右手でいろいろなことが出来るようになるなんて思っていなかった。ここにきてリハ

「自力できたのが本当に嬉しい」と喜びの言葉があった。3ヵ月経過し、今後もリハビリや自主トレーニングを継続して行いたいというご自身の意欲や希望もあり入所を継続されている。

現在も毎日右手の自主トレーニングの継続や歩行練習も歩数計を使用し1日6000歩を目標としてご自身で励むことが出来ている。

各職種間で目標を共有し介入、またご本人のモチベーションを維持できるような介入を継続した結果、ご本人にとって想定以上の結果に繋げることができ、QOLの著しい向上に繋がった